

# 連携教育・共同研究で『新しい障がい理解教育』を創る —本学特別支援教育講座・附属特別支援学校・附属平野中学校 の取り組みにおける「交流及び共同学習」を通して—

## 本研究の背景

2007年3月に国連で採択された「障がい者権利条約」により、障がいのある人のインクルーシブな教育・生涯学習の確保が第24条に明記されました。我が国はすでに条約に署名し、現在批准にむけた国内関係法規の改正に向けた論議を進めています。教育分野では、障がい者制度改革推進本部や中央教育審議会初等中等教育分科会・特別支援教育分科会などにおいて、インクルーシブ教育システムの構築に向けての特別支援教育の方向性が議論されています。障がい理解教育は、このような教育の基盤となる「インクルーシブな文化」の創出に不可欠となる教育です。

## 1. 平野5校園共同研究と障がい理解

平野5校園の共同研究軸は、幼・小・中・高にいたる一貫カリキュラムの開発（「縦の連携」）と特別支援学校と4校園との交流及び共同学習（「横の連携」）の二つです。共同研究における障がい理解教育は、これら二つの要となります。これにより、OECDによるキー・コンピテンシーの一つ「均質ではない集団の中で活用できる学力」の育成が可能になると考えます。今後グローバルな国際社会と関わる世代となる子どもたちにとって、このような力の育成は喫緊の教育課題です。全校園種を有している平野地区だからこそ、そのような課題に応え得る実践研究及びモデル創出が可能になると考えます。

## 2. 共同研究の三つの視点

- **マクロレベル**: 全校園種を有する平野地区附属校園のカリキュラム・授業における共同研究を特色とし、様々な実践知の体系的活用を可能にする学校モデルを構築、地域・全国に発信します。
- **メゾレベル**: 各校園の発達段階に応じたインクルーシブ教育の基盤となる障がい理解教育のカリキュラムを開発します。
- **ミクロレベル**: 総合的質的分析法に基づき、教材開発、指導方法等、授業づくりに関わるP D C Aサイクル・システムの研究を進めます。

## 3. 教育実践の構想とポイント

実践研究の構想とポイントは以下の5点です。

- 「新しい障がい理解教育の原則」をふまえた教材開発を中心にした授業づくり
- 大学教員・学生と附属教員の協力による授業展開
- 教育的効果を得るために必要な時間の確保（事前学習に十分時間をあて、交流・共同学習に臨む）
- 生徒の意識調査、感想、ビデオ記録等の分析
- 大学・学校間のきめ細かなマネジメント体制

## 4. 障がい理解教育のカリキュラムと展開

この実践研究は、平成24年度の8月下旬から10月に実施された、特別支援教育講座・附属支援学校（中学部）・附属平野中学校の取り組みです。

### 【事前学習】（計17時間）

- 附属特別支援学校の教員による授業（2時間）  
「アスリート理解～アスリートとともに～」
- 大学特別支援教育講座（富永ゼミチーム）による授業実践①（2時間）  
「障がいって何?」—自分たちの問題としてとらえる」
- STEP DAY「被災地に『点字アート』を贈ろう」（全日）  
視覚障がい者との交流や、点字の学習、メッセージ考案をへて、点字アートの制作（大学教員等のサポーターによる共同作業）
- 大学特別支援教育講座（富永ゼミチーム）による授業実践②（2時間）  
「障がいって何?」—社会的障がい・プラス面からとらえる」
- 大学特別支援教育講座（富永ゼミチーム）による授業実践③（2時間）  
「視覚障がいのとらえ方—できることに注目して考える」
- 大学特別支援教育講座（富永ゼミチーム）による授業実践④（2時間）  
「障がいのある生徒とともに活動するために」
- 交流及び共同学習に向けての準備（グルーピング等）（2時間）



### 【中学1年生と中学部との交流及び共同学習】（計4時間）

- 第1回目: 支援学校中学部生徒が中学校を訪問  
顔合わせ・グループ編成・iPadによる自己紹介等の活動
- 第2回目: 中学校1年生が支援学校を訪問  
体育館でグループによる紙飛行機の制作、紙飛行機大会の実施
- NPO団体の障がい者の方との交流及び共同学習  
支援学校と交流した生徒以外の生徒は、ユニバーサルデザインスポーツ「ボッチャ」で、障がい者の方と交流会を実施

### 【事後学習】（計2時間）

- お礼のメッセージカードの作成
- 感想文に基づく中学校内の意見交流。

